

賀川豊彦の畏友・村島帰之（その八）

第96回～第104回

賀川豊彦の畏友・村島帰之（96）－村島「アメリカ紀行」（1）

「雲の柱」昭和7年1月号（第11巻第1号）へ寄稿したレポートの分載をはじめます。

アメリカ紀行（1）

村島帰之

シカゴ

八月十日

朝八時、シカゴステーション着。島津岬氏と外にシカゴ神学校主事キャッシュマン氏及び神學生の諸君が出迎へてくれる。賀川先生はキャッシュマン氏に伴はれ、小川先生と一緒にすぐシカゴ大學構内の神學部職員ホームの方へ行かれる。私だけは島津さんに伴はれてYMCAへ。

島津さんはシカゴに居ること既に六年、最初は日本人のために小規模なホームを経営して居られたが、今を去る二十年前、今の日本人YMCAを設立して、日本人のために何彼となく世話をしてみられる。

賀川先生は「島津さんは領事以上の民間日本領事だ」といったが、それに違ひない。YMCAにある人の話を聞くと、日本人で死人があつたり、警察事故があつたりすると、領事館から直ぐ島津さんのところへいつて来る。何のことはない。此方が領事館だ。領事の俸給はよろしく島津さんに支払ふべきだーといふ。

島津さんは見るからに親しみのあゝ好紳士で、私にこんなおじさんがあつたら、お小遣いをせびるのに善いがなア」と思ったほどだ。この日の事は別に書くつもりだ。

食事をしてあてがはれた明るい部屋で、ベッドの上に横はつてみると、いつの間にか、うとうとして寝入つて了つた。そして目をさましたのは午後二時。永い間の睡眠不足の蓄積を清算した訳だ。

既に食事の時間を経過してゐるので、町へ出て果物を買つて来て昼飯に代える。

午後はYMCA萬國大會の記事を書いて大阪毎日へ送る。

四時、賀川先生から電話がかかって来たので、島津さんと一緒に指圖に従って、テーラーさんのセツルメント Chicago Common へ出かける。イタリー人の沢山住んでゐる細民地区だ。テーラーさんは之等の外人を米國の文化に浴させて米國化しやうとして、此處にセツルされるとの事だった。

テーラーさんは今年八十の老人で、今日まで三十二年の久しきに亘って、細民の友として働いて来られたのだ。

テーラー夫妻の案内で館内を見せて貰ふ。特に変わった處とてもないが、家庭を持つ準備の教育を娘たちのためにしてゐるのや、体育のためのダンスや、職業教育としての手工をやってゐるのが目についた位だ。それよりも、テーラー氏がギャングの親方たちの政治的進出に對し極力抗争してゐた苦心談を面白く聞いた。

けふは旧教徒の祭日で、セツルメントの前の通りを楽隊が行進したり、肖像が街頭に飾られ、その附近にいろいろの店が出てゐたりする。日本のお祭と似てゐる。私たちはその人ごみの中を見て歩いた。

先生は此の日午後四時からシカゴ大學の神學部チャペルで「基督教と社會改造の精神」第一講「社會改造の精神としての十字架」について講演されたのだったが、入場し切れなかった者も多かったといふ。

先生に別れて、私と島津さんとは、ステート街のシカゴ劇場へ行く。娯樂研究のためだ。美しい制服制帽のボーイに案内されて席につく。

廣い劇場だ。舞台の両脇には女神の彫刻などがあって紫や赤の光線で彩られ、その下からはホーンを通じて舞台の音楽が拡大されて聞えて来る。

舞台では今、音楽の最中だ。まばゆいやうな光線か樂師の上に注がれて、彼の頭の髪の毛を光澤よく反射する。音楽がすむと、日本の芝居の競り上げと同じやうに、樂師も樂器もその儘奈落へ姿を消して了ふ。

音楽の次はレッグショーだ。舞台の前面全体に立木があると思つてゐたら、オーケストラの進行につれて、その立木が動き出して、木の幹と思つたのは悉く女の足で、木の葉と思つたのは、女のスカートを拵げてゐるのだった。

踊り子がよく跳ねる。トーダンスも鮮かだ。踊子の筋肉のしなやかに動くこと！ 女の踊子に代つて

男の踊子が細かいダップを踏む。妖怪のやうに全身をくねらせる。すべてスケールが大きい。

ダンスの次がジョーク。一組の男女が軽口を戦うところは日本の萬歳と異なるが、オチをいったり、クスグりをいふのが男でなくて女なのは、さすが女の國だけあると思った。しかし英語の素養に乏しい私にはそのジョークが全く判らない。ジョークに次で、ピアノだがジョークをいひ乍ら演奏するのだから日本の滑稽音曲といふところだらう。

あとは映画——空気の関係か、鮮明に寫る。

十時、館の外へ出ると、いつの間に降り出したのか、ひどい雨。急いでタクシーに乗る。窓から見る雨に洗はれたシカゴの町は、昼間見た町より美しいと思った。

YMCAに帰りつくと間もなく激しい雷雨だ。二度ばかりは近所に落ちたと思はれたほど大きい音がした。

久しぶりに涼しく寝る。たった一人で。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(97) — 村島「アメリカ紀行」(2)

「雲の柱」昭和7年1月号(第11巻第1号)への寄稿の続きです。

アメリカ紀行(2)

村島帰之

(承前)

十一日

よく眠った。涼しかったからでもあるが、永い間汽車や外人ホテルで、真の安眠を取られずに来たからである。日本人経営のハウスで、自分独り眠ったのは可成り久振りであった。

午後二時からYMCAに泊ってゐる柳田さん(シカゴ大學物理化學科學生)に連れられてシカゴ大學へ行く。

一大學生ロックフェラーが、同窓の友に「君は學者となれ、僕は実業家になる。そして僕に君のために大學を寄附しやう」と約束したことから、この大學は生れたのだと柳田さんが説明してくれる。

私は犯罪學の文献がほしかったので出版部へつれて行って貰って目録を貰ふ。

何しろ世界の富豪が支持してゐる大學だけあって、大建築が矢鱈に建て連ねられて、寧ろ立てつ
まりすぎたやうな思ひがする。

ゴチック式の塔のある建物を、礼拝堂か図書館かと思つて行つて見ると食堂だったりしたほど建
物を贅沢してゐるのは、貧しい日本からのエトランゼには奇異の感を抱かせずには置かぬほどだ。

賀川先生をその構内の一建物に訪ねる。そして四時からのチャペルにおける先生の講演第二回
目を聞く。けふは「基督による革命」といふ題で話された。

先生の美しいフレーズが口をついで出る。満堂の聴衆は酔えるが如く傾聴した。講演がすんでか
ら、折柄来会した林博太郎伯と島津さんと柳田さんと私の四人は、また賀川先生たちと別れてYM
CAへ帰り、島津さんの私宅で四人晚餐を頂く。

林伯の自然科学に関する話を十一時近くまで面白く承る。

賀川先生と全一日別れてゐるので、心配になる。尤も、先生の方がより以上に私の事を心配して
ゐて下さるに違ひないが。

十二日

朝の間は手紙などを書いてゐて空しく過して了つた。先生の方からも電話一つかゝつて来ない。
で、午後は思ひ切つて独りでシカゴの町へ出て行く事にした。

電車にのつて、汽車の時間表についてみた小さなシカゴ地圖を頼りに、シカゴの繁華な街と聞いた
ランドルフストリートで降車。豫てシカゴの百貨店と聞いてみた所へ這入つて見た。日本のやう
に混んではゐないので、本宮の店らしい気がする。

そこを出て、街のそちこちを見て歩く。電車や自動車は織るやうに行き交ふ中を、レデーたちが
落ついて道を横切る。交通道德を守るのと道路が整然と出来てゐるからだ。

人道には日本のやうな車や荷を置いてないから大手をふつて歩ける。

弗の國アメリカも不景氣は争へない。各商店のショーウインドーには、値下した値段を大書して
雑貨物を並べてゐる。こんな事はアメリカとしては余り見なかつた現象だといふ事だ。

パレーズ劇場といふのへ這入る。入場料は五拾錢。すべてがシカゴ劇場に似てゐる。手風琴の独
奏に始まつて、百萬長者の音楽隊といふ漫画劇とでもいいたいショーがある。小さな男が出たり、

大きな男が出たりして滑稽の限りをつくす。

そこを出て、とあるランチ店へ這入る。そこは「欲しいだけ喰べて六十仙」と書いてあったが、人間の食量には限界があって、さう沢山にたべられるものではない。三四品たべて出る。

街を行くと、女の着物の単色が、いつも模様ものの日本のキモノを見つけてゐる者には却って美しく見える。美しさは小さな柄の美より、やはり肉体や皮膚の色に適合した色合にあるやうに思はれた。

街をモット観察するために、歩けるだけ歩いて帰る事にする。

シカゴも美しいのは一局部で、六七丁も離れると、ガランとした煤けた垢だらけの都會だ。殊に至る處に黒人が住んでゐて、曲り歪んだ古道具などをショーウインドーに並べてゐるのが余計に町をきたなく見せる。

だんだん南へ来ると、ストックヤード（屠牛場）の匂がする。シカゴの名所だといふが、私は行って見る気がしない。

疲れたので十五丁目あたりで電車にのる。降りる場所を見通さぬやうにと、窓に顔をつけて町名札に注意する。で、無事に36町目で降りることが出来た。

YMCAの附近は以前は米人の住居地域だったが、いつの間にか黒人に占領されて了つたのだといふ。米人は黒人が近くへ来ると直ぐ引越して了ふからだ。グレシャムの法則が当てはまる。

イタリー人も多い。これが一番犯罪率が多いといふ。

「夜分は一人歩きをしないがよろしい。殊に日本人は金を持ってゐると思はれてゐるから余計危険です。」と瀧澤さんは教えてくれた。

夜はYMCAで賀川先生の講演だ。島津さんは自家の印刷機で、白身拾った活字で印刷したハガキを在留邦人へ発送して置かれたので百五十人余りの人が集った。先生は日本の近状を面白く話された。

その後で先生の経営事業の映画を寫す。小川先生が技師で、私が活辨を勤める。

終わってから賀川・小川両先生及び瀧澤さんと付近のドラッグストアへ行ってアイスクリームをたべる。

ドラッグにはトニック（薬用）と称してアルコール含有二十二パーセントのワインを賣つてゐる。そして食後に分服せよなど書いてあつて巧みに法網をくゞつてゐる。酒呑が薬を買ひに行くとい

ふのもアメリカらしいナンセンスだ。

三日振りに一緒に寝る。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(98)－村島「アメリカ紀行」(3)

「雲の柱」昭和7年1月号(第11巻第1号)への寄稿の続きです。

アメリカ紀行 (3)

村島帰之

(承前)

十三日

午前七時半、島津さんのお宅へ朝飯によばれる。島津さんのところへ持込んで来るいろんな事件の話の訊く。

邦人のコックで歐洲戦乱に米國軍人として出征した男に年金が下ったが、本人に渡してはどうなるか判らぬといふので、郵便局ではわざわざ島津さんに手渡方を頼んで来た。それで島津さんがその男を訪れて行くと、別に白人の女がゐて、その金が来たら二人結婚するつもりだと物語った。それから間もなくその男がやって来て、女と一緒にになったが、巧く行かぬので別れた。金も皆使って了って、おまけに「レストランを出たので失業してゐるからYMCAにでも使ってくれ」といって来たといふやうな話。

そこに在留邦人の一面が窺れるやうな気がした。賭博と女に生活の意義を見出してゐる彼等を軽蔑するよりは同情したい。

食後先生は、郊外のマッコーマック神學校へ講演に、私は島津さんにつれられてパルモアハウスに林伯を訪ね、荷物のお手傳などして三人、エルで感化院を見に行く。

エルの上から瞰下したシカゴの場末は何の事はない、戦争に荒らされたペルジュームの町か、十八世紀の名画に出て来る破れ家のスナップだ。殊にそれが煤でよごれて黒くなってゐるのを見ると、

そこへ近づいた處で手足が黒くなるやうな感がする。

シカゴは大部分がきたない街だなアと沁々思ふ。

エルの絡点で降りて、大森といった感じのする郊外の、小さいなコテージのある間を六七丁も行くと感化院に行きついた。

Chicago Parental School と記した門から這入ると、美しい建物が五つほど。

校長のコートレー女史の案内で院内を見る。五つの建物はそれぞれ家庭になってみて、夫婦の職員が世話をしてゐるのだが、その五つが地下道で一つに統一されてゐるなどは金のかゝつたものだ。

創立以来二十八年を経てみて、現在二百名の院児を収容してゐるが、交替で炊事の世話もする。そして多くの時間は農業に従事させてゐるので七十エーカーの農場があった。チャペルもSSもあつた。一週二回は健康診断もするといふ。別に逃亡を防ぐやうな設備はしてゐない。これは日本の感化院も同じ事だ。

感化院を出て三人食事を共にし、エルに乗る。暫く行くと、**Dame** といふステーションがあつた。**Dame** はドイツ語で女の事だ。

そこで林伯は、「ドイツでは女便所には **Dame** と大書してあるのが常だから、ここは女便所という処だよ」と笑つて、更に諧謔を一つ「或男が便所へ行つた處が、ダーメと書いてある。これはダメかと思つて別の方へ行くと、ヘーレン（男便所）と書いてある。ナアーンだ、此處も矢張りヘーレンのかといつて歸つて来たつてき。」

エルは旺んに車内でエルの宣傳をしてゐる。その廣告の文句が善い。即ち、

5511 trains daily on the "L", more convenient than any automobile.

私だけは二十六丁目で下車して、グランドパークに来てゐる米國一といはれるサーカスを見に行く。

巾一丁、縦五丁もあらうかといふ大天幕の下には、AからZまでの指定席をしつらへ、その一つ一つに三百人はゐるだらうから、大衆席を合せれば優に一萬人以上を収容してゐるに違ひない。（入場料七拾五仙、指定席七拾五仙）

舞台は六か所ほど並べて作つてあつて、そこで同時に、同じ芸当が演ぜられるのだから、あつちを見たり、こつちを見たり、忙しい事だ。

それに舞台の周圍をめぐるトラックには、また別な曲乗や仮装行列などが次から次へと行はれるので忙しい事つたらない。男女の曲馬を始め、綱渡り、ブランコ等々いづれも日本の軽業を更に大規模に行つたもので、殆どのべつ幕なしに演じて行く。

最後は人間大砲で、砲声一発、人間が宙に高く飛んで出た。私は大砲の直ぐ傍にいたので耳が痛かった。

砲弾代りになって砲身の中へ這入って行く時、砲弾男は私たちの方へ向って手を振ったが、何だか犠牲になって行くものゝやうな気がして可哀さうな気がした。

シカゴには屹度夏季を利用して Ravinia ラビニアといふ、ニューヨークのメトロポリタンに次ぐ大オペラが来てゐるとの事だったが、つひに行く機会を逸した。

此のオペラは、菓子賣から成功した金持が、一興行五拾萬弗位の損を見越して開演するものだといふ。夏は値段も安くし、且つオペラだからといって礼装せずに入場出来るといふ事だ。入場料に公衆の入場料が二拾五仙とレザーブ席が三弗だ。

先生はこの日も午後四時からシカゴ大學で三回目の講演をされたが、終始、感動を与へて、聴衆はクライマックスの處では震え上ったやうだった。と帰って来た小川先生の話し。

午後七時、ユニテリアン教會における軍備反對演説會へ行く。英米人の後を承けて先生は立たれた。

「日本人は戦争を好まない。今日までの戦も常に防禦のための戦だ。のみならず、戦ひのために益するのは二三の財閥だけで、民衆に塗炭の苦しみに悩んでゐる。日本國民は平和を望む。アメリカは日本の物資の消費地だ。何で日本がアメリカと戦はうか。

われ等は経済的平和を要求する。各國が経済的協同組織を持って相互に交易すれば、戦は防遏する事が出来やう」

と叫ばれた。

十一時、汽車に乗る。デトロイトに向ふためだ。発車前、寝台に這入る。汽車はわれ等が眠りに落ちた後、十二時すぎ、動き出した。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(99) — 村島「アメリカ紀行」(4)

「雲の柱」昭和7年1月号(第11巻第1号)への寄稿の続きです。

アメリカ紀行(4)

(承前)

デトロイト

十四日

朝七時にデトロイトについた。

小川先生のオペリン時代の學友ピアースさんが自動車を持って迎ひに来てくれる。

先生の講演は電報の行違ひのため、今夜やる事が出来なくなったので、已むを得ず一日を観察に費す事になった。

先生はいつも「僕は見物にアメリカに来たのじゃない。」と喋って居られる。かうして行違ひからとはいへ、丸一日を観察に費される事は先生の意に反する處だ。

デトロイトは小さくまとまった町だ。「遅く開けた町だからだらう。フォードによって始めて繁盛した街だからね」と先生が説明される。

町を離れてデアポンの町へ這入ると、そこにはフォードの自動車工場が遠望される。

まづ事務所へ立寄って視察の手続きをして、見物用の同社の自動車（バス）で工場へ運ばれる。一日に五千人位の見物人が来るといふので専門の案内人がついてゐる。私たちについてくれたのはフォードの幼友達でジョンソンといふ老人で、特別にわれ等四人だけを案内してくれた。

工場の前には職工たちの乗って来た自動車がパッキングしてあるが、それが延々として五六丁に上ってゐるから驚く。

工場は千百エーカーの廣さを持ってゐて、四千人からの労働者が働いてゐるが、初任日給七弗で一週五日労働、一日八時間といふ労働條件だ。

此頃は不景気なので大分失業者も出してゐるらしいが、失業者にも一週二日づつは仕事を与へて最低の生活費だけは得させてゐるといふ。

工場へ入って見ると、例のカーレントシステムで、仕事は水の流れのやうに順次運ばれて行つて、停滞したり、逆戻りさせるといふ事がない。それで工場の長さは四千呎の長きに及んでゐる。

出来上りの材料はそれぞれ自動式の鎖によって、索道の仕掛で仕上部へ運ばれて来る。それを一つ一つ順次に組立てて行くのだが、職工を働かせては疲労させるといふので、彼等の立してゐる場所が工程の進行と同一速度で動く仕掛けとなつてゐる。

その仕掛けのない部分は、車輪のついたイザリの車のやうなものに尻を下ろし乍ら、工程の進行するにつれてその車に腰かけた儘、それと併行して行くやうにしてある。

大きい材料――例へば自動車の箱や車の覆ひなどは天井又は地下からそこへ運ぶやうにしてあって、職工がその運搬のために時間と労力と精神を労することのないやうにしてあるのは感心させられた。

照明は青のネオンサインを使ふてゐた。また工場の塵埃及び熱を防ぐためにフレッシュ・エアがたへず工場のペーパメントに吹きつけてゐた。

「職工がみんな明るい顔をしてゐるでせう」とピアースさんがいふ。

「人が少いね」と先生が機械化された労力に驚かれる。
自動車は一分間に二台の割合で出来上って、運転手さんが試乗してゐる。

ついでにガラス工場を見る。板ガラスが、紙を作るかのやうに流れ出て来る。ガラスはセルロイドで二枚合せたやうになってゐて、石で打ってもヒビが行くだけで破れないと云つて、一々石で破つて見せる。

工場を出て、事務所に帰り、そこの三階のカフェテリアで午餐を認め、さらにピアースさんの自動車（新しい自動車を見て来た目に、如何にその自動車のきたない事よ、だが、そこに虚飾を避ける謹厳なピアースさんの人格が偲ばれる。）で、数哩離れたグリーン・フィールドへ行く。

ここはアメリカ建國当時のパイオニアたちの部落を移して来たもので、それにエジソンの研究室をも併設して、活きた米國博物館を現出させてゐるのだ。勿論フォードの作ったもので、彼の夫人の記念にその生れた土地を選んだのだといふ。

グリーンランドの中心点には公共的建物があつた。チャペルは煉瓦作りの本館と木造の白壁の塔とからなつてゐる。先生は直線派といふのだと説明された。

内部に這入ると、白塗の椅子が數十脚並べてあつて、正面の教壇には、粗末なテーブルとオルガンが置かれ、窓もガラスだけでステンドグラスなどはない。中央の天井から下つたシャンデリアも、白いガラスのみの質素なものだ。

折柄、タワーベルが鳴る。それは獨立戦争の際、英軍の襲来を知らせたといふ由来附の鐘だ。
チャペルの隅の一つの椅子に腰を下してゐると、自分たちが、今しもメーフラワー号で上陸して

来たパイオニアになったやうな気持ちになって、厳肅な気がするのだった。

教會の外に法廷もあった。木造の粗末な堀立小屋だが、その法廷で、リンカーンが弁護士として弁論をしたのだと訊くと、敬虔な心持がする。暖炉の薪が燃えてゐるが、これは昨年フーヴァー大統領が来てつけたのをその儘消さずにゐるのだといふ。

小學校は煉瓦造りの小ぢんまりとした且つシックリした建物で、二人宛の机が十五並んでゐたが、私と小川先生とが腰かけた最後部の一つの机が、小學生フォードがゐたといふ。

さうして説明を案内人がすると、みんなが一斉に私たちの方を振りかへって、そこに偶然腰を下ろした二人の東洋人の顔を見た。

机の片隅にはHFといふ文字が彫ってあつた。少年フォードが小刀でほつたものだ。私はその彫つた箇所へ紙の端をのせて鉛筆で転寫した。イン(ホテル)もあつた。台所のストーブには鍋がかゝつてゐて、その上には玉蜀黍やアップルの乾したものが掛つてゐた。

寫真店や郵便局や公会堂もあつた。すべてが質素なものだ。

「今のものよりも此の方がいいね」といって、先生はそのシンプルな處を激賞される。

最後にエヂソンが電燈や蓄音機を發明した研究所を見る。階下はモーターなどがあつて、階上が薬品棚で周回を取巻き、中央に試験台をおいた大廣間だ。

エヂソンの助手をしてゐたといふ老人が一々説明してくれる。エヂソンが蓄音機を作る時に使用したオルガンで一人の婦人が讚美歌を弾いた。一緒にゐた會衆と一緒に合唱した。

私は身の引きしまるやうな感激に襲はれた。

みんな去つた後で、私たち四人がなほ踏止つて老人と話し會つた。エヂソンは研究に夢中になると、殆ど寝なかつた。そして疲れると、このテーブルの上へゴロリと寝たんだと説明した。

機械が声を出すといつて世人を驚かした最初の蓄音機――それは如何にエヂソンの熱心な息がかつたであらう――を老人が吹込んで見せてくれる。圓筒が回転して錫板に筋のついて行くといふ簡単なものだが、それが直くまた声になって反復した。

エヂソンは此の研究室が、ここへ移されてから一度視察に来て「九分九厘までその儘だ。唯一分違ふといふのは、床板が美しくなつてゐる点だけだ」といつたといふ粗末な、たとへば日本の田舎の村役場のやうなものだが、これが世界に光明を与へ、声を残させた發明がなされたところなのだ。

私たちは立ち去るのが惜しい気がして幾度かその辺を歩いて見た。

研究所の外には鉄道が通ってゐたが、そこにある赤塗の駅は、曾てエデソンが駅夫をしてゐて、朋輩にいちめられた駅を此處に移して来たものだといふ。

詳しい事は、私の長男健一が、幼年クラブを読んで知ってゐる。日本へ帰ったら彼からモウ一度聞かせて貰はうと思ふ。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(100)－村島「アメリカ紀行」(5)

「雲の柱」昭和7年1月号(第11巻第1号)への寄稿の続きです。

アメリカ紀行(5)

村島帰之

(承前)

フォード飛行場

グリーンフィールドを出て、デトロイロへ引返さうとした時、傍らにフォード飛行機のあるのを見て、賀川先生が見やうといひ出した。早速降りて他の見物客と一緒に工場を見る。

飛行機は将来は大量生産的に製作しやうといふ考へを持ってゐるさうだが、現在は注文品だけで、私たちの見た時には英國の注文機と、米國の海軍機がほゞ完成してゐた。一週間に一台位づつは作り上げてゐるといふ。そして一台の値段は五萬五千弗ださうだ。職工は四百人使つてゐる。

参考品として、ライト兄弟の作った最初の飛行機や、五年前日本へも飛んで来た世界一周機(デトロイロから出てデトロイトに帰つたフォード機)があつた。後者にはブロック、シエリー二氏の名が記されてあつた。

飛行機に乗る

工場を出やうとした時、一台の飛行機が客を乗せて飛んだ。十分間附近の空を飛ぶのが？弗だといふので、先生の発起で乗つて見やうとふ事になつた。

機はフォード型の旅客機で八人乗りだ。賀川先生は真っ先に乗つて、操縦士の直ぐうしろに座を占めた。客はわれ等三人の外に、外人大部分が女と案内役のピアースさんの知人？さんの子供、九つ位なのと一緒に乗る。

七百エーカーあるといふ広い飛行場の中央を滑走した後、機はフワリと宙に浮いた。少しも動揺を感じない。自動車よりも動揺が少い。まアエレベーターに乗ったやうな心地といふのだらう。それにしても、地上を離れる瞬間の動揺の少い事にはまづ驚かされた。

飛行士の名は **V.N.Johns**、上着も着ず、帽子も被らず、ズボンに白シャツの平常のままで、飛び乍らうしろを向いて話かけるといふ気軽さだ。

機は空高く昇った。瞰下すと白い道が木の葉の繊維のやうに、諸方に種々の線を抜いて延び、その間にローンのやうな立木が線の膚を示し、その中に箱庭のやうなコテージが行儀よく並んでゐる。まるで箱庭だ。殊にそれ等のシーンが実に鮮かに展開される。

まるで秋のやうに澄んで見える。一幅の田園風景画だ。飛行機が旋回して機体が斜になると、その箱庭が前後左右に動く。デトロイトの街も見える。遠くを見ると限りなき平野だ。遠く光ってゐるのは湖だらう。

やがて眼下に **ford** の文字が見える。よく注意して見ると、さっき離陸した飛行場だ。そして機は静かに殆ど何の反動もなく着陸した。

耳が少し変だ。が、直ぐ癒った。

高度は千二百呎であつたといふ。

「まるで凧にくくられて空へ上つたやうだったね。そして地下の緑が山のやうに見えて衝突せぬかと心配したよ」と先生がいふ。

よい経験をしたものだ。

それから再びピアースさんの自動車でデトロイトへ引返したが、途中ピアースさんの自動車は故障を起こした。そこでピアースさんの折角の好意を無にするやうな気がしたが、已むなく電車で行く。そして夕飯後なほ時間があるので、駅の近くの映画館に入って時間を潰す。そしてまたもや汽車。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(101)－村島「アメリカ紀行」(6)

「雲の柱」昭和7年1月号(第11巻第1号)への寄稿の続きです。

アメリカ紀行(6)

村島帰之

(承前)

ウイノア湖

十五日

朝七時、ウイノアレーキに着。出迎の自動車の前面のガラスに、KAGAWAと大書してある。それは明晩の先生の講演の宣伝広告だった。如何に先生に期待してゐるか判る。

湖畔のウイノアホテルに這入る。

先生は Dr.Bleederwolf のところへ食事によばれて行かれる。われ等はホテルのカフェテリアへ。勘定場で金を払はうとするとカガワのパーティなら要らぬといふ。見すばらしい東洋人を憐んだ訳ではない。賀川講師を優遇するためだ。

実際、私たちは周囲の有閑階級の人々に比べて見すばらしい服装をしてゐる。私なんぞは一昨年製の合服が日本出発以来これ一着を着通しで、ズボンの筋目なんかは拡大鏡でも判らないほど埃にまみれ、袖の處は切れ、襟は垢でよごれてゐる。これ、一つのルンペンの姿だ。ニューヨークまではこれで通すのだ。

先生は賀川服と、それから六年前の渡米の際、佐藤さんから贈られた合着を着て居られるが、これまた小生と似たりよったりで、カラーなんか黒くなってゐるといふ有様だ。

面白いことには、先生が余りに賀川服がよごれたので、クリーブランドで洗濯に出されたら一弗五十仙の賀川服が、洗濯賃を一弗七〇仙もとられた事だ。「これぢや洗濯賃の方が高いや」と大笑ひ。

食後外へ出て見る。小さな湖水だ。湖畔は一帶の森でローンを縫ふて美しい道がついてゐる。湖には飛込台の設けなどがあって水泳場となつてゐる。ガソリンボートが走つてゐる。附近には小じんまりした別荘が木立の間に点綴してゐる。まあ日本でいって見れば御殿場といふところだ。

手紙を出さうとしてホテルの案内所で切手を貼っていると「今日は」と女の声がする。見るとアメリカのレディーだ。

よく話して見ると、ウィルミナの先生だ。名はキナー？とかいった。今晚、ヤングマン、ヤングウーマンのために先生に講演して貰へまいかといふのだ。

午後二時、先生の講演が始まった。上等のバラックといったやうなホール。聴衆は一杯だ。七八百はあろうが、それが殆ど全部が白髪の老人だ。アメリカの宗教も固化して老人の慰安になったのか。それとも、かうした別荘地へ避暑に来られぬので、働きを終わって余剰価値で生活してゐる老人のみが来てゐるのかも知れない。

尤も若いレディーもゐる。それは若い男よりも遥かに多い。アメリカは男がオフィスの中で働いて、その稼いだ金で女房や娘を外へ遊びに出してゐるのじゃないかと思った。これはシカゴなどの街の通行者の大部分が女であった事でも思ひ合される事実だ。

先生は日本の神の國運動について述べられた。日本の基督者の真剣な事を説いて、「日本の基督者は酒を呑まぬのみか煙草だって吸はない」と喝破された時は満堂の喝采だ。アメリカでは牧師も信者の女も煙草を吸ふからだ。

私たちは演壇の背後の椅子に腰を下してゐたが、先生の講演が終わると司會者 **Blederwolf** 博士は會衆に私と小川先生の事を紹介してくれた。私たちは椅子から立上って会釈をした。満堂の拍手に迎へられ乍ら。例によって先生は握手攻めだ。私までがその握手のお余りを頂戴する。

五時から青年男女のグループの集りへ出かける。一哩ほど離れた湖畔だ。二百人位のハイスクール程度のボーイとガールズとが食卓にローソクをともして並んでゐる。ガールとボーイが一人置きに並んでお互に話しあつてゐる光景は日本では見られない。ボーイもガールフレンドをいたはつてゐる。

私の隣りに座ったミス・タフトは元の大統領タフトの姪ださうだ。私は中學時代にタフトを日本で迎へた記憶を話す。食後余興が始つたが、これまた男女二人が組になつてやる場合が多い。

最後に賀川先生が立つて、先生の自叙傳を話された。猫の婆さんの話はみなに興をひいたらしく、隠亡に関する話はみな顔をしかめてゐた。先生はアメリカの墮落を罵つて青年の奮起を促したが、非常な感激を与へたらしかった。

私を掴へて日本の話をしかけた一少女があつた。話のはづみで私がOKといふと、彼女は大悦びで「この紳士はOKといった」といって、仲間に触れ歩いた。

帰途は湖畔の並木沿ひに先生と只二人で歩いて帰る。途中で行きあふ人が先生と知って、呼止めて話しかける。先生も愛相よくこれを迎へて五分も十分も立話をする。それが一人二人ではなく、一哩の道を帰るのに六七人に囲って、一時間余りを費す。此方は手持無沙汰に傍らで立ん坊だ。

森の廣場には、ペビーゴルフ場などが出来てゐて、電光の下で多くの男女が楽しんでゐる。暗い湖水の中でも男女の声が聞える。生命を楽しんでゐるのだ。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(102)－村島「あめりか紀行」(7)

「雲の柱」昭和7年1月号(第11巻第1号)への寄稿の続きです。

アメリカ紀行(7)

村島帰之

(承前)

十六日

朝七時、三人で食事をすする。両先生は名説教家モルガンの説教を聞きに行かれたが、私は睡眠不足を取りかへすために眠る。

昼食は両先生が帰って来ないので私独りです。そして食後談話室で手紙を書いてみると、入代り立替り米人が話しかけに来る。自分の名を日本字で書けといふ婦人や、齒科医専が日本にもあるかと聞く紳士やら。

うるさいので外へ出ると、森の緑蔭で多くの人々が寝ころんだり、食べたりしてゐる。いふまでもなく男女の一組だが、半数は老人夫婦だ。美しい光景だと思った。

午後三時から先生の「十字架の勝利」の説教。十字架を自ら背負つてゐる先生だけに力強い。石井十次氏や芸妓の信仰談などが引例される。終わると同時に出発の仕度だ。

宿屋の各室には一冊の聖書がある。これには **Gideons** と書いてあつて、宿屋による傳道をするためだといふ。

先生を崇拝し六十哩の彼方から来たといふ一牧師のカーでワルソー駅まで送られ、そこからシカゴへ出る。

シカゴへ着いたのは午後七時だったが、連絡バスで○○○へ出て、八時二十分発の汽車でチャタカに向ふ。

チャタカ

十七日

朝チェームスタウン着。この附近はスエーデン人の村落ださうで、瀟洒なコテージが緑蔭に散見する。自動車は四十五哩の速力で走って、約三十分でチャタカについた。

チャタカは一八七九年、メソヂスト教会が日曜学校職員の修養のために夏季キャンプ村を設立して以来、同派の一般信者が避暑と修養とを兼ねて毎夏季に集るところで、コンモリ繁った森の彼方此方にはコテージ風の別荘が散在してゐる。

一方は廣々としたチャタカ湖が展けて、美しい眺望が一瞬の裡に恣にすることが出来る。湖水は巾二十哩といふから相当に廣い。ウイノア湖の比ではない。

私たちはアテナホテルといふのに泊る。昼飯に食堂へ出かけると、ピンク―米人の好む色だ―のユニホームを着た給仕人が、どうやら夏季労働の女學生らしいので、賀川先生が「どこの學校の生徒か」と訊くと、果たしてオハイヨのカレーヂの生徒だと答へた。そして此處に働く給仕人がすべてそれだと説明した。

賀川先生は「僕もかうして給仕をした事があるから。チップは第一回は五拾仙、以後は貳拾五仙宛やる事にしよう」といはれる。小川先生も「最初はチップを貰ふのが、きまり悪い気がしたが、問もなくそれを期待てるやうになりましたよ」と話される。

聞けば、エレベーターボーイも矢張りハイスクールの生徒だった。「来年はカレーヂへ入るので」といつてゐた。

食後、三人で湖畔を散歩する。さすが宗教的集會のある場所だけに、数千の人が集つてゐるのに拘らず少しも騒しくはない。あっちこちの緑蔭のベンチに上品な老人が憩ふてゐる。

「ここは要するに善男善女が集つて来るアメリカの本願寺だよ。」と賀川先生の説明だ。

湊に沿ふた小高い丘に、エルサレムの大きな模型が作られてゐる。私ちはその一つ一つを踏査

した。

午後三時。先生はこのプレジデントからお茶によばれて行かれたが、私は例によって昼寝、小川先生はカチカチとタイプライターで忙しい。

眼がさめるとタワーのチャイムが讚美歌をならしてゐる。ベッドに横たわり乍ら窓の青葉を透して見える湖水を眺めつゝ、それに聞入てゐると神聖な心持の外に、やゝセンチメンタルな心持が湧いて来る。

先生が帰られて一緒に本屋へ行く。先生はグリーンブランドと同様、自著の扉にサインをさせられるのだ。

夜八時から先生の講演が始まる。会場は大地を盆形に掘り下げてスタジアムのやうに梯段を作つたもので優に五百は這入るといはれる。先生が演壇に現れると、會衆は一斉に立って敬意を表し、さらに先生が司会者の紹介で壇上に立つや、會衆には申合せたやうに白ハンカチを取出して打振り乍ら歓迎する。白ハンカチが、風揺らぐ白い花のやうに美しい。これがここの一つの風習なのだらう。

先生の話は「生命法則としての愛」だ。愛についての詳しい説明が語られて會衆をうならせた。善い説教だった。先生も満足げである。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(103) — 村島「アメリカ紀行」(8)

「雲の柱」昭和7年1月号(第11巻第1号)への寄稿の最後です。

アメリカ紀行 (8)

村島帰之

(承前)

十八日

小川先生の元気の善い大砲のやうな声に眼をさます。

午後二時半から先生の「日本における神の國運動」の講演がある。

資本主義は個人主義だから駄目だ。協同組合で行かねばならぬとの主張を力強く叫ばれた。終わって先生は牧師達のティーパーティーへ行かれる。

チャタカに涼しくて善い處だが、モウ出発しなければならない。殊に今夜の出発は、渡米以来、殆ど一日以上別になった事のない賀川先生と別れて、私ひとは東へ向ふのだ。何だか、自分が旅をしてゐるといふよりか、他力で引っぱり廻されてゐるやうな感じだ。トウマル龍にのせられて五十三次を護送されて行く囚人のやうだ、とも思ふ。

夕飯後、音楽會が開かれる。私は今晚の出立が気になって落ついて音楽を聞く気になれない。小川先生は「ナアニ未だ早い、未だ未だ」といつてゐる。

小川先生がホテルの男に訊かれた處では、九時二十分ウェストサイド発の汽車にのれば善いといふのだが、何だか心元ない気がする。

八時四十分、漸く自動車 came ので、暗い田舎道を走って、ウェストサイドに着いたのが九時十分、駅員に聞くと、ニューヨーク行は八時五十分とやらで、今のさっき出た處だといふ。私の予感が当たったのだった。

私は途中の自動車の中でも何だか心配で、賀川先生が「何をそんなに沈んでるのです」と訊かれたので、「何だか汽車に遅れる気がしてならぬのです」と答へたほどだった。

そこへバファロ行の汽車が来た。私はそれに乗って乗り換へるのだといふ。太狼狽にあわて、私は先生たちへの挨拶もそこそこに飛乗った。

一人旅はアメリカへ着いて以来最初の経験だ。殊に、予定の時間とは違ふ時間の汽車に飛のったのだから、不安は一層甚しい。切符を改めに來た車掌に「バファロへは何時につくのか」と訊いたのだが、「萬事呑込んでゐる」といつた風を見せるだけで、ハッキリ答へてくれない。

小駅についた。「バファロか」と訊く。「ノー」といふので一安心。そして「ネクスト？」と訊いて見ると「イエス」といふ。十一時過ぎバファロでミルウオーキー線に乗替へる。

ブルマンカーの寝台も上しかない。黒のボーイに五十仙を奮発して与へて萬事頼む。

寝台も上と下とは大變な違ひだ。動揺がとても甚くて、身軽な私のからだは動きどうしだ。これでは眠れさうもないと思つたので、デアールを一服呑む。

眼がさめたらニューヨークへ着いてゐる筈だ。

(この号はここで終わる)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(104)ー村島「アメリカ紀行」(1)

『雲の柱』昭和7年2月号(第11巻第2号)への寄稿分です。

アメリカ紀行(1)

村島帰之

ワナメーカー

八月十九日

朝八時半、汽車はニューヨークのグランドセントラルステーションに着いた。今井さんが出迎へに来てくれる。

附近のカフェテリアで簡単な朝飯をとる。カンタローブが何よりもおいしい。

前回は世話になったと同じモーニングサイドアベニューの今井さんのアパートへ行く。そして前回と同じ、公園に面した二部屋を借りる事にきめる。

そこへ電話だ。大原武夫兄(大毎紐育特派員)から、

「多分今日あたり帰ったろうと思って掛けた。これから訪れる」と、親切な電話だ。持つべきは友だと思ふ。

やがて大原兄は奥さん(奥さんとも、私は古いお馴染だ)同道で、大原兄自らフォードの新式のをドライブして来訪。何よりも、まづドロドロによごれた洋服(私は日本出発以来、一着の洋服で通して来たのだ)を着替へる必要があるとあって、レデー・メードを買ひに、ワナメーカーへ自動車を走らせてくれることとなった。

大原兄のドライブ振りは熱心そのものだ。私は兄と並んでフロント坐を占めてゐたが、途中で兄に話かけて叱られたほどだった。

ワナメーカーは日本に最も善く知られた百貨店だが、今ではマーシー百貨店の方に押されて客も少い。

レデーメイドの洋服（といふのも可笑しいが）を着て見ると、不思議にキチンと合ふ。

「君のからだはレデーメイド向きだね。日本人は、なかなかレデーメイドでは合はぬものだが」と、妙なところへ大原兄が感心してすふ。

しかし、キチンと合ふ三十四のサイズのものには沢山の既製品はあっても、青黒い日本人に向く適当な色がないので、大原夫妻と今井さんと三人の共同見立によって、霜降りのもので、少しサイズの大きいのを直して貰ふことになる。仕立職人に寸法をとらせる。出来上りは明後日の昼だ。値は三十九弗五十仙。

洋服は兎に角、新調される事になったが、私の頭髪はこれまた日本出発以来、一度も刈った事がなく、唯一度、耳のあたりを小川清澄さんに鋏でつんで貰っただけなので河童のやうだ。

それを見た大原夫人が、
「ついでにここで散髪をしてみらっしゃい」
と注意される。

実は私も散髪しやうとは思ってゐたのだが、クリーブランドで、大阪 YMCA の某君が散髪に行く、見る見る内に頂上をわづか許り残して全部坊主のやうに刈って了って「オヤオヤ」と思った時には既に遅く、あたら色男が YMC A 大會へ来て入道にされて了った——といふ事実を見てゐるので、私も坊主にされては——と尻込みしてゐる次第であつた。

大原兄に聞けば、頂点だけを残して裾一面を坊主のやうに刈るのはスポーツマン型だといふ。
「では僕が君を坊主にせぬやう散髪屋にさういって上げるから」
と大原兄がいてくれるので、恐るおそる理髪屋へ這入る。大原兄は理髪師に「余り短く刈らぬやう」と注意をしてくれてゐた。

なるほど、毛の端を僅か許り鋏でつんでくれただけで坊主にはならずすんだ。大原兄の注意で、職人に二十五仙チップをやる。

いよいよ頭も顔もすんで、散髪代の傳票を見ると十弗とあるてはないか、大原兄も私も屹驚仰天した。が、よく質して見ると、ケタ違ひで一弗の間違と判り、漸く安心して、帳場に一弗を払って出る。

「これで洋服が出来たらゼントルマンだね」
と、外で待ってゐてくれたみんなが冷かす。

日本料理を喰べに

そこで――つまりゼントルマンのなり掛けといふところで、大原夫妻が私と今井さんに日本食を御馳走してやろうとあって「芳の家」といふのへ行く。日本人の経営で、何でもあるといふのだ。

西洋人も来てゐる。彼等は「スキヤキ」を喰べに来るのだ（マグロの刺身は、よほどの通でないと喰べないさうだ）。

私たちは、寿司、まぐろの刺身、そばなどを御馳走になる。実にうまい。日本でもこれほどおいしく喰べた事は嘗てない。醤油の味もなつかしい。

窓から見てみると、石炭屋のトラックが、舗道にある穴から石炭を入れてゐる。一々台所へ運び入れる面倒がなくて便利なものだ。唯トラックの圖体が大きくて、兎もすれば往来の自動車の邪魔になるので、パーキングしてある他の自動車を押しのけやうとするが、錠がかかっているから動かない。

大原兄のカーは、前のガラスがあいてあったので、そこから手を入れて車を動かして、漸く目的を達したやうだった。

(つづく)